

戦前から戦後へ

地域文化運動とともに

話者 橋本孝蔵

聞き手

草志会

戦前の青年団のこと

——戦前から戦後にかけての福生の動き、都内から福生に戻ってきたその辺のところから、ちょっと話して下さい。最初に青年団をやっていたらですね。一段落してから「あかざ」や文学作品にのめりこんでいく、その辺のきっかけから。

橋本 自身は福生に生まれて、石屋の倅ですが、住んでいた駅前の人達は、まだ他所者というふうに見られていました。たとえば、加藤市蔵さんなんて偉い人がいるんですが、その加藤さんを青年団長にしようと、だいぶ運動したことがあります。

ところが、やはり「てんしゃば」、いわゆる停車場です

が、駅前の連中なんて駄目で、永田とか長沢とかから出る訳ですよ。ただ威勢がいいのは停車場なんですよ。

私が青年団に入ったのは、スポーツですよ。走るのが速かったものだから、支部対抗の選手ということで青年団に入ったんですよ。

その後、軍需工場か何かでだんだん団員が少なくなっていました。内田勇さんという方がいたんですよ。内田さんは役場について、昭和二七年頃亡くなった方ですが、非常に勉強家ですね。西条八十の『蠟人形』という詩の雑誌の同人だったと思うんです。その雑誌は全国的にも有名な詩の同人誌で、それにとどき投稿されていたような方でした。その内田さんが、私の前の青年団長をやっていたんですよ。

だんだん団員が少なくなってくる時代で、優秀な者は兵隊に取られちゃうものですから、残っているものはあまりい

なくなっていて、そんな中で内田さんが、この次の団長は「お前やれ」という訳で、内々に工作していたんですね。私は東京に勤めていたから、とてもじゃない、団長などできないと思っていたんですけど、いつか知らないうちに、団長になっていたんです。停車場から団長が出たのは初めてなんですよ。やはり団員が少なくなっていたってことですね。結局、私は東京に勤めながら昭和一四、一五年と二ヶ年間やったんですけど、昭和一六年に「青少年団」という官製の青年団ができるんです。それまでは、まがりなりにも、独自の青年団といえます。大日本青年団の傍系みたいなものですけど、やはり自主的な青年団でした。昭和一六年四月に今までの青年団は解散させられて学校単位の官製の青少年団になり、校長が団長になる訳です。少年団というのは小学校三年からで、青年団は小学校の高等科を卒業した頃という様な形で青年団ができ、その上に壮年団ができる。戦時体制にだんだん形づけられてくる。福生では浜中学校長さんだったかな。でも、浜中学校長は青年団の事は副団長である私と田中先生にある程度、その運営をまかしてくれました。

一四・五年頃までの青年団は、お祭り、慰安会、いわゆる素人芝居、そういうことで終始してましたが、軍需工場などができ、戦争が激しくなるとそういうことができなくなる。私も青少年団になってから、これではしょうがない

から勉強会をやるうじゃないかと何回か計画したんですが、駄目になっていきました。私自身は結局終戦のときまで東京に通っていたんですが、東京に通えきれなくなったということと、戦争が激しくなって、みんな兵隊にいったらうんで、中国研究室のような図書館ですが、こんなところでノンビリしているのかなあ、と思ったんです。それに青年団や青少年団をやっていたものですから、やはりじっとしていられなくて、役場に入ったんです。

その役場へ引っ張ったのも内田さんだったような気がします。そのとき、ちょうど加藤市蔵さんが助役だったんです。内田さんという方は、絶えず非常によく勉強していました。私が「あかぎ」に関係していた頃、「ぬやまひろし（詩人）がくるから座談会をやれよ」といっては、私の文化活動を支えてくれたんです。ですから、内田さんがもうちょっと長生きしてくれたら、役場も、もうちょっと変っていたかもしれない。とにかく私が尊敬する立派な方でした。たとえば内田さんがいた頃は、「職員は勉強しなければ駄目ですよ、週刊誌でも何でも読みなさい」といって、指示を出していました。ところが内田さんが亡くなってからは、ようするに職員というのは字が上手でソロバンができればいいんだというような空気があって、一時は職員のレベルダウンをまねいたような気がします。

戦後の青年团组织

橋本 だから、戦争が終ると青年たちはみんな、何をして



よいかわからなかった。青年団を作ろうということで、動きはじめたんです。二〇年の九月頃だったかな、終戦後すぐ兵隊から帰ってきて、みんな抛りどころがなくなり、このままではしよ

うがない、祖国再建をということで、だんだんみんな青年団俱樂部に集まってくるようになったんです。俱樂部が一つのよりどころだった。たまたま福生の青年団俱樂部にいた「お婆」が非常にいい人で、ときにはアルコールなんか飲ましてくれたりする。そこでみんな集まってくる。兵隊に行った連中も、戦前にその俱樂部で育っているから集まってくるわけです。そこでは、みんなで話し合いをする。それで何とかしようということ、青年団を一月頃作っただけです。たまたま細谷勇太郎さんが大久野だったか、平井だったかの校長をやっていたので、その青年団と座談会をやったわけです。私自身はその頃役場において、青年団員の年齢二五歳を過ぎちゃっているんですね。私だけが二

九歳の団長でね、団員とは少し離れているんです。それで、二五歳までの連中が集まり、大久野あたりまで行って、いろいろ話し合いました。みんな軍隊から帰ってきたばかりでしたが、いろんな問題をかかえていたし、みんな真剣に討論が始まったわけです。こんなわけで、自分たちだけで集まってもしょうがないから、だんだん活動がひろがっていったわけです。

——それは昭和二〇年のことですか。

橋本 二〇年の暮れ頃にそういう活動が始まるわけです。

青年団が二〇年一月にでき、暮れ頃から大久野の青年団と座談会を始めています。西秋留あたりではその頃、隠匿物資が農協あたりに相当量あったようなんです。復員軍人の方は外地から着のみ着のまま帰り、ものすごく殺氣立っているわけです。それでまず隠匿物資の摘発運動をやるんです。特に西秋留なんかは相当激しかったようですね。それで単独の青年団よりも、もう少し組織をでかくしようと集まってきて、三月頃には南部がまとまるんです。南部というのは西多摩郡の南部、五日市町を中心とした秋川流域の町村の事なんです。それから、ここまで来たのは郡団を作ろうじゃないか、という空気が出てきて、二一年の三月頃から郡団結成準備が始まったのかな。

青梅を中心とした北部からは羽村の並木周一さん、霞の水村一郎さんが出てきた。郡団を作るまでの連絡はほとん

ど福生が中心で、打合せも福生でやってきた。そんなことから郡団を作るときに並木周一さんが「オイッ橋本、団長やれよ」といわれたんですが、「俺は役場にいるから駄目だよ」ということわり、それで古里村の石田正義君がやるわけですよ。その時私は、総務部長になった。秋に連合青年団の運動会をやる、ということになったんです。それが二年だったかなあ。南部はね、自分たちで手弁当の運動会にしようということ、寄付は一切もらわない、もう昔の青年団じゃないんだから自分たちで自主的にやろうということ、で結束したよ。ところが、北部の方は衆議院議員や都会議員立候補者から寄付をもらっちゃったんです。

俺はちやうど総務部長だったんで、寄付をもらった人には一切挨拶させないようにしたんです。そのかわりね、公職追放されたものだけ挨拶をさせる。確か郡長(西多摩郡町村会長)だった、石川弥八郎(先代)さん、それから都議会議員だった岩浪光二郎さん、その二人だけ挨拶させたいんです。そんなことで結局一期で青年団をやめたんです。

「あかざ」と文化運動

橋本 それで、その頃福生の中で、どうしても読書会をやらなくちゃ駄目だと思っただけです。さかんに本を集めては目録を作ったりしてました。それがその後、「道芝会」に

つながっていく。ですから、二一年に道芝会が始まります。青年団をやめて間もなく「あかざ」の人が舞い込んできたのかな。その辺の前後が、よくわからないんだけども。

それでね、館田たてださんて方がいたんだけど、リアリズム文学を追求していた人で、その人が中心になり、中学校の山崎愛治先生。たしか小学校の教員住宅にいたんですよ。会合というと全部、学校の教員室を使ってね。「あかざ」を発足させたのが、二・一ストの中止命令のあった日だ。私はそれをラジオで聴いて、今井誉次郎たかさんんかが、「アッ」と嘆息していたのを覚えています。「あかざ」の二回目の会合か何かでしたか、今だからいってもかまわないでしょうが、元の福生の学校にも隠匿物資、軍の紙があったんです。小さい倉庫だけど、三〇メぐらいあったのかな。これをもらって原稿用紙を作った。まだ印刷屋がなかったから、館田さんが東京あたりで作ってきたのかな。「あかざ」という名前を入れた原稿用紙をつくり、それで「あかざ」の回覧誌をつくったんです。そんな形ですから印刷したものではないんです。

——それは二一年秋くらいですか。

橋本 そうですね。今井さんんかが中心になっていました。小作先生も多少関係していたんですかね。

——私なんかも出席してね、聞かせてもらっていたんです。(草志会員・小作寿郎)

橋本 当初のメンバーは東秋留の先生が二名、熊川が二名、羽村が今井さん、地元は私と館田さん、山崎先生。だいたい先生が中心だった。そのうちに夏期大学を始めようということになったんですが、これがどこから来たのか、ちょっとわからないんですね。五日市の上田さんあたりか、青梅あたりから来たのか。あるいは、館田さんあたりか。それから夏期大学が終わる頃からメンバーがガラッと変わってくるわけです。すると「あかざ」が、福生の中だけで結構まとまってくるんです。それまではね、各学校の先生が入っていて、それが夏期大学という頃になると、秋川、熊川なり羽村から来た先生はいなくなっ、福生だけのものになるんです。

——昭和二年に「あかざ」ができて文学活動が始まりますね。その頃、橋本さんは青年団の活動から手を引いて、文学の方をやっていきますね、これは『ふっさ子』に出ていたんですけど、その年に演劇をやっていきますが、これはどういうきっかけなんですか。

橋本 それはね、戦前に娯楽大会か何かで素人演芸をさかんにやっていたんですよ。私なんか主演したりしました。何かやろうとしても何もないものですから、素人演芸のよくな変なものもやっただけです。演劇活動が本当に出てくるのは、もっと後なんです。『ふっさ子』に出ていますが、奥石さんという人がソビエトから帰ってきたのは、

昭和二三年の秋で、その頃から本格的な演劇活動が始まる。奥石さんは前進座と多少関係があったんではないか。だから演出なんか、なかなかうまくて。それから遠藤さんという人がいました。二三年頃かな。いわゆる「ましら」なんかやって、郡の大会で優勝するようになる。

——「ましら」は昭和二四年と書いてあります。

橋本 昭和二〇年、二一年には、まとまった演劇活動というのは、まだまだです。

多摩自由大学との関係

——福生の昭和二年の話にまた戻るのですが、すでに八王子で多摩自由大学をやっているんですけど、これとの関係は何かあるんですか。

橋本 その辺がね、よくわからないです。五日市の上田さんが自由懇話会のどこかでつなごっていたんですね。ですから具体的なきっかけは、上田さんあたりだったんですかね。今井さんなんか動いていたんじゃないのかなあ。そんな気がするんですね。その頃、何かにつけて今井さんが中心でした。今井先生とは私や山崎先生が、山崎先生の教員住宅で時々会っていろいろと話を聞いたりしていた。今井先生が動かれたんじゃないのかな。だから西多摩の教職員組合も今井先生が中心になって、やっていたんじゃないの。

かな。だから夏期大学を聴講された方も、先生が非常にかかったんじゃないか。

——直接福生の人が多摩自由大学へ行って聞くということとはなかったのですか。

橋本 私なんかしかいないね。上田さんという人は、五日に疎開していた人なんです、最近亡くなったね。その上田さんあたりが、多少上とのつながりをもっていただかうか。それから立川あたりの動きとのつながりは、たとえば朝日新聞の糸井さんなんかとのつながりがあったんじゃないかな。その辺はよくわかりませんが。

——その辺のところは橋本さん達はあまり意識しなかったのですか。たとえば自由懇話会とのつながりとか、その下部組織をつくるとか、そういったことはあまり意識しなかったのですか。

橋本 そう、あまり気が付かなかったですね。後で見たらね、立川のパンフレットがあるんですよ。その頃誰かがもらってきていたんじゃないか。ですから立川あたりから誰か来ているかも知れない。西多摩文化連盟なんて架空のもので、さっぱりわからない。

——この年表は今日のためにつくってみたんですが、これをみながら考えたんですが、八王子が一番早く動き出していますね。八王子の影響が西多摩にもあって、その影響で西多摩夏期大学ができたんじゃないかな、

と思っちゃうんですが。直接的は関係ないんですか。橋本さん達の意識にはそれはない？

橋本 直接そういうのはない。我々の外で行われていたかも知れないが。特に私は役場にいたからね。そこまでは、まだ入っていないかった。ただ、だんだんやっていくうちに、そういう臭いがしてきた。

——それに対して、ヤバイかなという気持ですか。

橋本 そういうものは感じなかった。さっきいったように役場の総務課にいた内田勇さんが「ぬやまひろし」が来るから座談会をやれというので、青年団倶楽部を使って「あかざ」でやらせる訳です。その時は内田さんは陰にいる訳。俺たちは、ぬやまひろしを呼ぶという事で、「あかざ」の連中は「アカ」だとレッテルを貼られる。しかし、内田さんのバックアップで擁護してくれ、町長の岸さんなんかも理解してくれるんです。町長はインテリの方で、そういうものに理解を持っていた。

——岸町長の日記の中にも、ちゃんと夏期大学に出たことが記されていますものね。

橋本 それからもう一つ、野坂参三が帰ってきたときにも、加藤市蔵さんが俺をわざわざ東京へ引っ張って行ってくださいなんです。加藤市蔵さんが野坂参三の報告を聞きに行こうというのだから。その頃というのは、そういう雰囲気があったんです。加藤さんは社会党で、町会議員に出るんで

す。自由党ではなかったんですね。加藤さんもある意味で他所者ですね。だから、青年団長にはなれなかった。

——本村じゃない訳ですね。

橋本 加藤さんという方は古いものにこだわらない。財産があるから、あくまで土地を守るとか、家を守るとか、そういうものがない。だから事業家だったかも知れません。

——明治大学の弁論部で大分活躍したようですね。

橋本 そうそう、馬になんか乗ってね。ハイカラだった。

戦後へ精神的切替え

——昭和二一年はわかったのですけれども、もう一度前に戻ってしまうのですが、昭和二〇年の八月一日がポイントで、さぞやいろいろな混乱があっただろうと思うのですけれども。それから九月とか一〇月とかに新しい活動がはじまるわけですが、その切替えは、どうだったのですか。

橋本 そうね、やはり復員軍人が殺気立っていましたし、みんな、何をやっていいかわからない。そこで青年たちはお互いに何かを求めて俱樂部にとにかく集まってきた。

青年団俱樂部に消防署が入っていたんですよ。青年団が一部しか使えないことになり、それでまず、消防署追い出し運動をやるということになり、その運動がそのまま青

年団運動につながっていく。それは青年の夜遊びの場所をつくらうということになるわけです。その辺からじゃなかね。

——いままでの戦争に対しては、どういう感じなので
すか。

橋本 そうね、しようがないということ、それをどうしようというところまではいかなかった。だから、怒りとか何とかというよりも何をしていいのかわからない、といてじっとしてられない。そんなことで、とにかく集まろうということなんです。

——解放感があったんですか。

橋本 解放感はある。とにかく俺たち自由になったんだから。ただ言論が自由になったんだからいいということが言えるなんていっても、なかなかのつては来なかったね。俺なんか、そういう点では先頭について、そんなものを書いたりして出していたんだが、みんながついて来なくて。読書会などをやっても、そういうことをしやべると駄目だった。むしろ熊川の並木先生なんかが地道にやっていたんじゃないかね。うちの方は少し走りすぎたかも知れない。それが文学活動の方へ行っちゃった訳。

何かしようというんだけれども、じゃあ何をしようか、ということになる。ヤミ屋なんかをやる奴もでてくるわけです。だけど、青年の方はヤミ屋まではいかない。職業も

ろくすっぽないので、それが娯楽大会になったり、お祭りにつながったりする訳です。青年団がいろいろな社会運動をやるというところまでは、いいないですね。

——そういう社会運動とか政治的な運動に走っちゃった方は、すぐに潰れてしまったということですか。

橋本 そのときに出来た、たとえば「明和会」なんかは、青年団を卒業した連中が町を明るくする運動ということで、街灯をつくったりしています。でも、それもすぐ立ち消えてしまいます。

——橋本さん自身は戦争とはどういう形でふっきれたのですか。

橋本 そうねえ、はじめは確かにみんなボーッとしていた。八月一五日に天皇陛下の言葉を聞いて、これはもう戦争は終ったんだなと思ってね。それから間もなく、アメリカさんが入ってくる頃から、緊張してくる。

——それは、いつぐらになりますか。

橋本 九月のすぐ。六日だったかに入ってくるんですね。それまでは、私なんかむしろ役場の中で、戦災復興で焼けた家をどうしようかとか、畳をどうしようかなどと、そういう仕事に日夜追われていたんですね。もう一つは、隠匿物資の摘発じゃないんだけど、それは各農家にけっこういろんなものがあつたんですね。それを知っている兵隊でうまい奴は、トラックで積んで自分の家に持っていき、

ずいぶん金を残した奴がいたらしい。私など役場では食用油をということで、それを捜しにいった、とにかく役場へ持ってきたら将校が来て、これは軍の物だから返せとばかり、車につんで持っていくってしまった。何のことはない、その油をどこかへ運んで闇屋をやり、大分もうけたとか……。そこで、しゃくだからもう一度油を集めてきてすぐに回覧板を出して、油の配給をやった。それなんか、むしろ町民には喜ばれたね。

——それは青年団のときじゃないですか。

橋本 いや、それは町としてやった。青年団は戦後すぐ戦災者の救済のためのバザーをやった。一二月頃だったかなあ。福生へ一〇〇〇人近く戦災者が疎開で入ってきていた。

——橋本さん自身は、戦争中からある種のさめた気持は持っていたのでしょうかね。

橋本 そう。俺なんか、むしろカリカリになった方かも知れない。単純だったから。だって、友達のおおくはみんな兵隊に召集されていった。俺だっていつ召集がくるかわからない。だからいつも死というものを考えさせられたね。それで、役場に入っちゃったんだけど。むしろ、一般の者はそこまではりつめていなかったんじゃないかな。だから帰ってくると、パッと切り替わって、すぐヤミ屋になったりする。

——それは、橋本さんだけじゃなくて。

橋本 そうなのね。それほどカッコはしていなかったんだね。空襲なんかあっても、兵隊の方が先に逃げて、町民の方があとだったからね。それで、「何をやっているんだ」なんて不平はあるしね。そうガリガリということより、むしろあきらめに近かったのかな。

——戦後の虚脱状態とかはどうですか。

橋本 それはもう幾日でもなかった。

——短かったのですか。

橋本 精神状態はね。むしろ虚脱状態になった人たちは陸軍士官学校の若い軍人。そういう人はずい分悩んだらしい。これは聞いてみると、半年位はダメだったようだ。陸士あたりの優秀な人こそ悩みますよ。一般の兵隊はそれほどせっぱつまってものを考えない。「まあ、しょうがねえや」というところじゃなかったかなあ。

——戦後四〇年位たって、始めてそういうことをいえるんでしょうけれども、日本人があれだけの長い戦争をやってきて、その精神的な清算というものは、非常に中途半端に終わっていますよね。いかげんに終わっていると思われまます。それは他の国とは違うんじゃないか。それがいまだに尾を引いているんじゃないか。戦後の評価ということとも関係ある訳ですけども、その辺はどうですか。

橋本 それは日本人の特性ではないのかな。何ていうか、

それほど切りつめてものを考えない。すぐ同化しやすい。だから右へ行けば右へいく。仏教でもキリスト教でも何でもうけ入れるような、そういう順応性が案外日本民族にはあるんじゃないかなあ。陸士の先生方とは違うんじゃないかなと思っただんです。陸士を特に思ったのは、陸士をやめて銀行へ入り、支店長をやった人がいるんですよ。その人の話を聞いてもそんなの。二年位闇屋をやり、それから大学に入り銀行の支店長になるけどね。だけど、そういう人たちと一般の市民とは、やはり違っていたんだな。案内、右に行けば右、左に行けば左と極端に素直に順応していったんじゃないかな。私なんかルーズだったんですけどね。ら、あっちいったり、こっちいったりしたんですけどね。青年団の中でも真面目くさってガンガン討論するよりは、いかにして遊ぶか、いかにしてお祭りをやるか、そういうことの方が本心じゃなかったかな。だから読書会などやっても集まらない。本当の一部きり。

——でも有志はやろうという意欲はある訳ですよ。

橋本 たとえば「どん底」を見につれていたり、いろいろやったんだけど。結構そういう意思はみんな残っているけれど、それだけのもの。ただ、ある程度そういうものを見にいった事によって、かてになってはいます。ただ、細谷利雄という男とか、これも優秀な男で早く死んじゃっているんですが。内田勇さんなんかも、非常に物事

を切りつめてよく考えている方だった。自分自身の物の見方というものがあつたようでした。確かに中途半端は中途半端なんですが、ドイツなどと違って徹底したものが無いし、その辺はどうなのかねえ。俺にはよくわからないんだ。

西多摩夏期大学の開設

——昭和二一年はだいたいわかったのですが、昭和二年、戦後二年三年と経ってきて、いよいよ夏期大学というのを七月から八月にかけて、かなりの日数をかけてやりますね。これの具体的な話をききたいのですが。

橋本 もう忘れちゃってるんだよね。

——夏期大学の場所は。

橋本 福生の第一小学校の講堂。あの頃、どういう手続きをしたか、あまり記憶にないんだけど。結構、先生がいたので、会場に使えたのかも知れないね。教員住宅でいつも会議したりしていたから。夏休み中で、あるいは内田勇さんなんかがやってくれたかどうか。山崎先生という中学校の先生がいてね。

——山崎愛治さんですね。

橋本 山崎先生が学校の方のことは中心になってやってく

れていました。

——学校の教員と、橋本さんのように役場の職員と、後はどういう人ですか。商店街の人は……。

橋本 商店街の人はあまりいなかったね。刈込さんなんかは軍人だったんですけどね。その人ぐらいだったかな。落下傘部隊かなんかにいた人で、なかなか詩人でね。いい文を書いていた。

——それから新聞記者はどうですか。

橋本 ええ、新聞記者もいました。純粹に土地の者というと私だけでした。ですからやった当時は私だけ。それからおそらくね、夏期大学の受講生は西多摩の教員組合かなんかを中心になって募集されたんじゃないかな。

——講師の選定はどうですか。

橋本 講師の選定はね、かなりできていたような記憶があるんですよ。やっていく間に、これはずいぶん変更があるんです。だけどこれはね、上田さんあたりのアドボイス、あるいは立川あたりの情報を得てやったのではないか。ですから同じ様なメンバーですね。その辺で決められていたんじゃないかと思うんです。

——他にはどんな講師がいたのでしょうか。最近僕が調べた中に、広島の尾道で活動していた中井正一さんがいますが、その人が「地方文化の問題」というのを書いています。その中で、「労農提携の夏期大学を労

働文化協会を持つことであった。これはだいたいにおいて成功した。延三万人の人々がこの講座に結集した」と、いつてます。そういう意味で中井さんが尾道でやっているようなことが、福生の夏期大学ともつながっているのではないかと思われる訳です。これは、まだ全国的には明らかになっていませんが、全国各地でかなりあったみたいです。たぶん福生でも、どこかで誰かとながっているんじゃないかと、僕はそんな気がしているんですけれど。福生の夏期大学では、かなり講師が二転三転していますね。最初に予定していた講師がなくなって、メンバーが変わったりしていますね。

橋本 皆さんの全部聞かれたんですか。

——印象に残っている話がありますか。

橋本 印象に残ったのはね、関鑑子さんの音楽講座。インターナショナルだけは素晴らしい歌だということを感じました。高橋慎一さんが、「吉川英治は駄目で中里介山はいい」といったこと。

——それは記念館でやった話の時ですか。

橋本 いや、福生でやった時に流行歌の話をしながら中里介山を激賞し、吉川英治はこういう風に説をまげているんだ、といった。

——それは八月三十一日ですね。

——あ、出ていますか。昭和二五年の『日本評論』に、その時の話の骨子が「吉川英治の秘密」という題で載るんです。

橋本 説を曲げているというふうにいっていた様な印象が強いですけど。

——印象的な話ですね。

橋本 これはピンとききましたね。戦前はこう書いてある、戦後はこう書いている、でこれは何だろう。こういうのじゃだめなんで、介山はこうだ。そんな話が非常に印象が残っていますね。あと、農業問題はわからなかったね。

——聴講生は何人位いたんですか。

橋本 始めは非常に多かった。あとになるといくらか少なくなつた。講師によりけりだった。だいたい平均して二〇〇人以上いたかな。あの会場いっぱいだった。

——鈴木東民と書いてありますが、聴かれましたか。

読売新聞の論説委員で、のちに代議士になった人です。

橋本 鈴木さんは来なかったかな。忘れちゃったよ。

——募集のパンフレットには載っているけど、来なかった人がいる。服部之総しそくも来ていないし、羽仁五郎も来ていない。

橋本 ——その当時は高橋慎一さんはいくつ位だったですか。まだ若かったなあ。

——復員してすぐでしようか。

橋本 まだね、八王子の寺町かな。ブラックみたいなどころにいて、私が交渉にいったのですけど。あの時は、誰も行き手がいなくて。

——夏期大学の主催は西多摩文化団体懇話会となっていますが、西多摩の各文化団体が加盟している組織ですか。

橋本 その組織そのものが、私にもよくわからないんですけども。

——実体がないのかな。仕掛人とかオルガナイザーがいたはずですよ。青年団やなんかの人だったらね、なかなかこういう具合には頼めないでしょう。

橋本 参加文化団体には「あかざ」、自由懇話会西多摩支部、新農村文化会、それに新政会、あとは西多摩婦人部会、これも実体はわからないんですけどね。それから、新日本婦人同盟でしょう。青梅の懇話会というのもわからない。それから西多摩民主主義研究会、これは小作孝一さんが作った。小作さんは、共産党の山村工作隊かなんかに行った人でしょう。

——これは西多摩民研と違って、昭和二二年六月ですね。正式には西多摩民主主義研究会。それぞれの会の代表者が集まって、やりましょうよ、といって会が開かれた訳じゃないんですか。

橋本 一回、とにかく集まったことはある。あとは今井さんか何か動いたりかなにかして、私の家を申込み場所にして、やったんだね。事務的にはうちの方がやったんだけど、細かいことは山崎先生がやられたのかも知れない。山崎先生が中心だった。

——二〇〇名も聴講生がきて、反応はどうだったんですか。

橋本 当時は結構あったよね。というのは先生方がそれぞれ悩みを持っていて、我々よりも、むしろ先生の方が真剣だったんじゃないですかね。その時の聴講生のメンバーでも全部わかれば面白いんですよ。おそらくね、一般の町の人というのもあまりいないし、学生なんかで「あかざ」に入ってきた女の人もいますけど、その連中はいく人かは来ている。青年団なんかはほとんど来ていない。細谷利ちゃんなんか来たかどうかという程度で、そういう人よりも先生が中心じゃなかったかな。

——講座のPRはどういうふうにやられたのですか。やはり口コミなんですか。

橋本 学校を通じてやったんじゃないかと思うんですね。だから比較的集まりが良かったんじゃないかと思うんですね。

「あかざ」の活動

——「あかざ」そのものは、文学とひと口にいつてしまえますけれど、文学の何を志したものののですか。

橋本 一般の同人雑誌ですよ。月に一、二回集まり批評の会をやりました。館田さんが中心で彼は、非常にするどい感覚の人で、話してもうまかったし、少し冷徹な感じのする人でしたが、すぐイデオロギーをふりかざす様なことはしない。ただ、確か新日本文学会に関係しているいろいろ活動されていた人で、疎開された方でしたね。それでも「あかざ」は「アカだ」といわれ、我々さえそう見られたのだから。

——「あかざ」は残っているのですか。何号位出たのですか。

橋本 これは一五号位で終いだっただけかな。

——今日初めて見せてもらうんです。門外不出ですね。なかなか表紙もいいですね。

橋本 ただこの号には俺の作品はないんですよ。別に『多摩文学』へ書く予定で取っちゃったんですよ。

——こういうふうな現物で回覧ですか。

橋本 現物で回覧です。それぞれ批評を書き入れて、最後にまた集まってやる。印刷するだけの資金がなかったね。

——「あかざ」というのは何ですか。植物ですか。

橋本 植物の名前です。一号と最後がみつからない。二号からはあるんですが、今、バラバラにしちゃってあるものですから。どうしても欲しいというのがいてね。佐藤文之助さんという、今、稲城に住んでいるんだけれども、自分も若い時にこういうことをやったんだということで、卒に見せたいんだと行って、「是非くれねえか」と持って帰っちゃった。

——回覧順序というのがありますが、橋本さんが最初に見て、次に刈込さん、次に森田さんに行くという順番になってる。全部で一一名。第二土曜日の夜八時、福生中学校です。「文学の眺望」というのが第三回研究会。四月一八日には花見ピクニックとなっています。我々と同じ様な事を行っていますね。結局、創作、詩とかのいわゆる同人ですか。

橋本 ええ、同人です。その中で、たとえば「文学の眺望」ですと、岩上順一のそれをテキストにするとかしています。——これがさっき言った隠匿物質の原稿用紙なんですか。

橋本 そうです。ですから原稿用紙のすみに「あかざ社」と出ています。

——読んだ人が批評のところ感想を書く訳ですか。

橋本 そうそう。はじめは簡単なものだったけれども、そのうち誰か色ぬりし、絵を書く様になっていきました。

——これをやっているときというのは、充実感があるんですか。

橋本 うーん、やっぱりね。ですから大学へ行っている女の子とか、コーラスをやっている子とか入ってきたんですが、続かなかった。青年団の一部も入ってきたんだけど、続かなかった。浜中（岩下）先生も来たけれど、ちょっと傾向が違うものだからやめちゃった。並木嶋雄さんも初めは入っている。一号二号に入っているけども抜けている。今井さんはかなりまでいたんだけど、あと作品を出さなくなっている。忙しくなったんだね。

奥石泉さんと演劇

——やはり文学畑の人、文学志向の人だけが残った。

橋本 それと奥石さんなんかの演劇の人がいました。奥石さんはソビエト帰りで結構文学青年で、昔いろいろやった人なんですけれど、福生へ疎開し、奥さんは福生の人です。最初に福生で、アメリカの図書室を青年団倶楽部へ作った時に、旦那がまだ帰って来ないので、奥さんを臨時職員にしたのみました。

——アメリカの図書館ってなんですか。

橋本 アメリカが本を持って来て、図書館を作れというんです。古雑誌を持ってきて、読ませると。誰も読みはしな

いですよ。仕方ないから青年団倶楽部に書架を作り、本を飾って、誰か置かなければ仕様がなから奥石さんの奥さんを頼んで番人をしてもらって、それで私が担当で毎月、月報を書く訳です。いく人見にきたとか、どうしたとか。書き様がなかつたですね。一回、書くのを忘れたら、怒られて。奥石さんが帰ってきたのは昭和二三年ですから、『ふっさっ子』には二二年頃来ていることになっていますが、間違っています。

奥石さんはロマンチストでした。たとえば戦争映画の場面、銃をバツバツバツと射って、人が死んでいくんだというふうリアルに表現し、フランス映画は、同じ場面でもバラの花とか、鳥がバタッと倒れるというように文学的に表現をして我々をひきつけたね。

——夏期大学はそういう形で終った訳ですが、もう一つ、演劇がすごく注目すべき動きをしていると思うんですけど。演劇とか美術とかいろいろあるんでしょうけれども、演劇はどうなんですか。

橋本 演劇はね、それから二年位して篠崎さん、奥石さん、遠藤さんとかが中心で、はじめは青年団からはじまったんです。たまたま遠藤さんは塗装屋で、美術的な事ができ、舞台のバックなんかできる人ですよ。それに演劇の心得があつてね。軽演劇的な、軽い非常に良いものを作った。「ましら」なんかがそうです。それで郡の大会に出て優勝

した訳です。

——遠藤頼雄さんが脚本を書いたんですか。

橋本 そうですね。脚本と演出をやったんです。それを篠崎君なんかがやった。二年位、郡で優勝しているかな。それはすべて遠藤さんの演出でした。

——内容としては、社会風刺ですか。

橋本 社会風刺だけでも軽いタッチで、ちょっと入っているような、非常に面白いものだった。

——やる人は素人ですか。

橋本 素人。全部青年団の素人です。

——その人たちは、仕込まれた訳ですか。

橋本 結構、本格的な仕込まれ方をしたのではないですか。篠崎久治君だって四・五年前までは羽村の劇団をやっていた。福生病院にいた人ですが、好きで羽村の劇団でやっていました。二・三年前に見た記憶がある。

——市役所の柚木誠一さんもメンバーですか。

橋本 そう、彼は前進座だったかな。それは興石さんとこの河村さんなんかが前進座に関係があって、そのあと、柚木君は劇団に関係したようだ。それで病気になるっちゃったけど。彼はかなり本格的にやったんだ。

青年団時代は、そういう状況だったけど、その土壌を引きついだのは遠藤さんで、ズブの素人ではなくて、かなりやっていた人でセミプロではないが、演出なんか非常にう

まかったし、動きなんかなかなかうまくて、田舎の青年団の劇団なんかやったら、とても太刀打ちできなかった。

——郡ではズバ抜けていたということですか。

橋本 ズバ抜けていたね。それから二・三年は演劇活動というのは結構盛んでね、映画館が出来た昭和二六年頃、役場のメンバーが中心になってやったことがあります。テートルで。コーラスなんか結構やったけれども、だんだん煙ったがられてきた。コーラスも潰れるし、演劇も潰れる。二六年頃かな。

——コーラスは、音楽の指導の先生はいたのですか。

橋本 それはね、好きな人がいて、女子大か何か大学へ行っている人でした。コーラスをやっているのは女学生が中心ですから、青年団なんかはあまりいなくて、むしろ大学へ行っている人だとか。

——コーラス・演劇・文芸と重なっている人もいますか。

橋本 「あかざ」なんかと重なっている人もいく人かいるんだけど、だけど重なってはいけるけれども融合はない。

——これを見ていると、それぞれの活動のピークがありまして、「あかざ」をやった時期、演劇を中心にやった時期、夏期大学をやった時期ということ、それに一貫して参加した人もいますし、それぞれも、それぞれに参加していったということでしょうか。

橋本 そうね、「あかぎ」が出て、それがおしまい頃になつて演劇が始まる。コーラスは「あかぎ」の夏期大学の頃にポツポツ出てくるんです。それ以降は私は良く知らなかったんですけれども、ただ保育園の保母さんなんかやっただかもしれない。そういう人たちが集まって、「あかぎ」の中に保母さんが入ってくる。保母さんと学校へ行っている人たちがコーラスをやって、仲間がふえてくる。ところが、これは保母さんから聞いたんだが、あの頃はだいたいロシア民謡をやったんだ。そうするとね、みんなにらまれた。コーラスもソビエトの歌しかうたわないからという訳で。それで親父に怒られてコーラスをやめたという人がいる。青梅の場合はレコード鑑賞なんかが残ったんですが、福生の場合は朝鮮事変頃から潰されていったんじゃないかなあ、という気がするんですね。

——自然消滅的に潰れていったというよりは、潰されたということの方が強いのですか。

橋本 潰されたというまではないかも知れないけれど、何かそういうふうな雰囲気があった様ですね。

——それは社会全体の雰囲気がそうですね。また何となく自由にやれないという雰囲気ですよね。それに對して反発心は出ないですか。

橋本 それはなかったね。たとえばレコード鑑賞なんか、もう少しあっても良かったんじゃないかと思った。その頃

青梅なんかでは、ずいぶん盛んに行われていたのね、クラシック音楽を聴く会があった。福生はそういう芽がぜんぜん生まれて来ない。演劇だけはたまたま出たけれども、それも遠藤さんがやめてから、やっぱりなくなってしまう。青年団自身がまた変ってきちゃうからかも知れないけれど。

地域文化運動の消滅

——橋本さんにまた最後にお聞きしたいと思っているのは、それだけ文学・演劇・音楽、その他もろもろの文化運動が澎湃として起ってきたと思うんですけど、それが実際には自然にといいますか、段々しぼんできて、地域の人になかなかとけこめないといいですか、地域の人が集まって来ない。そういうインテリ層が町を離れたたり、あるいは東京へ行ったり、というのと歩調を合せるようにして、運動がしぼんでいったんじゃないかという感じがするんですけど、それは前に橋本さんがお書きになったように、「やっぱりこの辺では育たないんじゃないか」という発想をされていたんですけど、その辺はどうですか。社会的な、日本全体の雰囲気はもちろんありますよ。特に福生だけでなく西多摩でこれだけ起っているんですけど、何か根付いていないような気がしますか。

橋本 やはり他所者がやったというような感じですね。だいたいにおいて疎開した人たちがやって、地元の人たちを引き入れるだけのものがなかった。われわれはやっていてもやはり中間的なもので、結局はすぐ逃げちゃうんですね。先生方もだんだんいなくなる。結構有力な人たちが動いたけれども、結局細胞といわれる共産党の人たちが極左に走っていく。そういうのがやはり非常に大きな理由があるんじゃないのかな。逆についていけないし、やられる、弾圧される名目になっている。そういう点もあるんじゃないかなと思うんです。やはり道芝会なんかが比較的地道に残っていたというのは、福生の中でも農村青年で、わりあいまとまっていた人たちだったからだろう。ですからソロバン塾の山崎君なんかのグループが比較的残っていた程度で、他のものはだんだんジリ貧になる。そういうつながりがなく、土地の者と他所の者とのつながりがなかったんじゃないかな。

——文化というものは上すべりではまずいわけでしょうから、その地域に根ざしたものを、それが本当の文化であろうと思うんですけれども、そこまではいかなかったということですか。

橋本 そう、いかなかった。要するに終戦直後でワッとなつて理論だけでやれる時代と、もっともつと中へ入っていかなければいけない。その辺のきちんとしたものが、われ

われの側にはなかったね。

——でも、それに参加した一人一人にとっては、大きな精神変革にもなっているでしょう。

橋本

一つのものになっていと思うんですけど。

——その典型がソロバン塾の山崎先生だと思えますね。いまの橋本さんの話の延長におくと。個人で奮闘されている最後の方ですかね。

——戦前のプロレタリア文学の役割というものは、非法なんですよ。それが地下部分でパイプとして、合法面ですね、プロレタリア文学とか、美術、演劇があって、だんだん非法な部分がつぶされていくと、文化がある意味で利用されてくるわけです。みんな結局拠点になってしまふ。それがつぶされてしまうと、もう下がないわけです。それと同じ様な具合で、下の方にはまた別の政治的なものが出てくるわけです。その唯一の合法面が、下の方に出ていた部分がこれだったという側面もあって、下の方も、非法法も、あの時期までは共産党はたくさん出ていたわけですから、代議士もね。あのパイプで全部地下へもぐっちゃって、その上の残った文化部分というのがこういうところにならばっているんです。それでもってある意味では駄目になつてしまった。ただ、そこを語る人は、下の方の部分とパイプになった人でないと、ちょっとわからない

いでしょね。文化だけの部分でいた人だとわからな
いのではないか。(会員・伊藤和也)

土地っ子と他所者

——ただ一つの、どんな運動でもそうなんでしょうけれど、他所者とか土着の人とかということを書いていたら、発展性はないわけですね。それを何かでうまくつなげるものがある時期できていて、たとえば自由民権運動でも、あるいはその後の大正期のデモクラシーでもそうでしょうけれど、そういうものがうまくかみ合っている時はいいのですけれど、一歩ずればじめると、急激にしぼんでいってしまうということがあるのですけれど。橋本さんなども、経験されておられるでしょうが、そういうものがある時期のり越えていて、都会から来たインテリ層も指導的役割をしていながら、それが大きな地域変革になぜ結びつかなかったのか。橋本 どうもその辺は、疎開してきた人は皆帰っちゃって、あと除隊して福生に住みついた軍人が結構残っていたんですよ。その人たちは、むしろうまく泳いでいる方が多かったですね。

私なんかやはり土地者じゃないんですよ。昭和二〇年までは駅前について、それから六町内に昭和三〇年位までいて、

P T Aなんかやってたりしていたんだけど、その町内にいる場合には、そこは全部本町の人たちだから比較的まだ良かった。ところが、三〇年に加美に移ったらそこでは完全に他所者になった。やっと今頃『土地っ子』になった。三〇年経って。それはなぜ土地っ子になったかというのと、私自身に問題があったと思うんですが、私は役所で課長だ、収入役だと何か部落の人から別な眼でみられていたんですね。進んで部落のいろんな事に入っていなかったからかも知れません。役所をやめてから老人会にも入り、いろんな年寄りと話をしたりして、それではじめて加美の一員になったような気がします。

——ある一定の儀式が済まないのと、本当に土地っ子に
なれないという状況ですか。

橋本 そうですね。やはり、みんなの仲間のなかに入って
ゆかないと。

——戦後のいろんな運動は、文学や演劇などいろいろ
あるが、地域社会の変革というものも、一つの大きな
目的だったのではないか。たとえば新農村文化会とか、
あるいは西多摩摩民研などもそうだと思うのだけれども、
自分の住んでいる地域を何とか新しい社会に造り変え
ようとする、それも一つの目的だったんじゃないかと
思うんですけど、それは最終的にはうまくいっていない
ということですか。

橋本 そう、うまくいかない。何ていうか、もったもった根強いものがある。たとえば神社の問題にしても、別に神社を崇敬しているのも何でもないんだけど、その組織の中でやらなければ駄目なんです。そういうことが、ものすごく根強いという感じ。それは一体、何なのかなあと思うわけです。今はお祭りに夢中になっているんだけど、お祭りの場合も、ものすごくエネルギーを発散するためにワッーとやっているんだけれどね。そういうものは一体、何なんだろうかなと。それは理屈ではないんです。そこへみんな集まってヤァヤァ／＼やっている。俺なんか子供のとときに、「お祭の準備しなければ、お祭りにセエねえぞ」といわれて、仲間外れにされる。そういう社会にとけこまない、やはり外様になっちゃう。その辺のところは日本が古いのか新しいのか。単に文化活動だけやっていてもなかなか切り崩せないんじゃないか。それで、これはあきらめて、若い者にまかせなければしょうがねえやと思ってるんです。

——その辺の問題は、橋本さんの青年団活動が昭和二一年をピークにして次第に消えていく形にでていると思えます。その後は夏期大学ということになると思えます。昭和二一年の時点では、他所者ではなくて地縁的なところが主なわけですよ。敗戦という時期を過ぎて、地縁的なものが何かやろうという一つのま

とまりを示したけれど、そこが昭和二一年で切れてしまったというのは、地域社会そのものとも関係してくるんじゃないですか。(会員・松本三喜夫)——それは連綿と続いてきた共同体意識みたいなものが壊れていない。だから外から入ってきた他所者がやって駄目ですよ。僕は四三年間いるけど、方言を使いこなせなかったために全然同化できない。おそらくね、昔は中学あたりから上級学校へいくでしょう。そうすると、離れてしまうんですよ。もって高等教育を受けると土地から離れるでしょう。そうすると、土地っ子でもおそらく意識は、かなり断絶しちゃうと思うんです。だからそういうところに入る儀式というのは、小・中学校ずっと通って青年団とかお祭りとかにかかわり、方言も自由に使いこなして入らないと絶対に同化できないと思うんです。だから食い物がなかった時に、物と交換しなければ食い物はないでしょう。ここだって貧しいわけですよ。余計な人数が入ってくると苦しいわけです。やはりそのときに田舎の百姓を憎む人が非常に多いわけです。疎開者でね。だけどよく考えてみると、田舎だってそんなにいいものを食っていたわけじゃないし、人数は決っているでしょう。そこにたくさん人数が入ってくると、どうしたってね、他に分けてあげる余裕なんかあるわけじゃないですよ。よくよく

考えてみると。だから都市と農村の対立みたいなのが、その辺からあるしね。こういう問題にも出てくるわけですよ。(会員・伊藤和也)

橋本 だから私なんか駅前に行ったときは他所者ではなかったんですが、駅前から離れて本村の部落に移ったら、やっぱり他所者なんだな。役場についても、役場の課長であっても、収入役であっても他所者なんだね。駅前というのは比較的新しい集落でね。たとえばこんな事があったんです。

羽村から戦後すぐ福生に住みついた人がPTAの役員になったんです。その人の話で羽村の実家へかえって、俺はPTAで忙しくてしようがないといったら、「よくオメエー福生へ行ったベエでPTAの役員をできるようになったなあ」とほめられたという。それほど羽村よりは福生の方が、感覚が新しかった。その中にいる限りは他所者ではない。それは停車場だけであり、他の所はガッチリしていた。その辺で入りきれない。やはり、そこにいくと部落のいろんなことに携わっていかないと中に入っていくけない。

——羽村に錦亀館というのがあったのですが、あそこで芝居か何か、やったことはないですか。

橋本 ないね。見に行った事はあるが。映画はやったね。

——村ではやっていたでしょう。村の青年が。

——羽村は演劇でも、いわゆる文学的なものはきませんね。

——でも「父帰る」とかいろいろいろのがありましたよ。

——うちの親父なんかは審査員か何かやって、コンクールみたいのをしていた時期があったんだね。(伊藤)
——平岡先生のお父さんなんて、かなりやっていたのでしょう。昭和のはじめから、かなりやったのではないかな。戦後も結構やったでしょう。

——地域とのかかわりの中で、一つには橋本さんがそういう活動をなさる中で、地域というところを見すえた形で、一連の活動をなさった。逆にいえば、戦前橋本さん自身は途中からかなりさめて見ておられたということですが、どちらかというと物をいうにも言えなかった。そういう解放感から、まず物をいおう、発言しよう、という様な姿勢でこういう活動をされてこられた。その辺の視点がどのあたりにあったのかなというのが、疑問なんです。(松本)

橋本 青年団を作った時はそういう発想なんですよね。ただ俺は、団員に少し強く出し過ぎちゃった傾向があるんです。一つには、私が三〇歳で、団員が二五歳以下ですから、これだけのギャップがある。私は役所にいたけれど、戦前に東京でいろんな生活をしたもんだから、それが甦ってくるわけね。多少なりとも大正デモクラシーをかじって、ダンスホールが最後だというと、それ行ってみるといった経

験があるものだから、戦前が甦ってきたという意識と、片方は戦争教育でやってきたわけですから、えらいギャップがあるんですよ。俺の方があわててね、何か読書会やら何やらという形でやってきた。どうもそれは今、反省しているんですよ。(笑) そういう傾向があったんですよ。学校の先生だったら、もっとうまくやったかも知れない。

——大正デモクラシーのルネッサンスみたいな。戦後、復活したような感じもありませんね。

——橋本さんは何年生まれですか。

橋本 大正四年です。東京に勤めていたのは、昭和一〇年に文部省の図書館講習所に入ってから。同一年に東京書籍、同一三年に日本大学図書館、それから近衛さんの霞山会館図書室に同一四年に入った。だから、かなり中央にいたんですね。友だちに新聞記者などがいましたから、毎晩新宿で降りて飲んで歩いていたね。そこで同人雑誌をやったり、昔の二中の連中が集まっていたね。その頃の二中というのは、だいたい杉並辺りの人が中心だから、その辺でいろいろと一緒にやりました。ほとんど毎晩のように新宿あたりで飲んでいました。作家が集まる小料理店、ジャーナリストが集まるバー、そんな店がきまっています。そこに行けばいろんな人に会えたんですね。しかし戦争が激しくなって特に二〇年の三月一〇日の大空襲それは東京も交えたとし、私自身もじっとしていられなくなりました。このままで

は、申し訳ないと思って役場に入ったんです。それがかえってマイナスだったかもしれないな。

——それは橋本さんが大正デモクラシーの最後ぐらいをかじって、昭和の始めはそういう形でやって、戦争中はともかくとして、戦後にまたそれが急激によみがえってきたということですか。

橋本 そういうことですね。

——だいぶ長時間にわたりました。お疲れさまでした。

戦後のこういう運動につきましましては、研究がまだまだ始まったばかりだと思えます。そういう意味では、これから西多摩ばかりでなく三多摩全体の比較の中で歴史的にも是非明らかにしていきたいと思っています。今日はお忙しいところ長時間にわたって大変貴重な話をうけたまわりましてありがとうございます。

◇これは、草志会の例会として一九八八年七月二一日、福生市熊川の若竹会館で開催した。掲載にあたって橋本氏に若干手を入れてもらった。質問は主に会員の新井勝紘があたったが、適宜会員(桜沢一昭・松本三喜夫・小作寿郎・菅井憲一・伊藤和也)と当日参加者(須田三郎・森田秀敏・長谷川次郎)が加わった。なお、『みずくらいど』への掲載許可をいただいた橋本孝蔵氏と草志会に改めて感謝申しあげる。

(新井記)